

倫理運動創始 80 周年記念研究フォーラム「確信を生きる」 はじめに

内田智士

一般社団法人倫理研究所において研究を専門的に行う倫理文化研究センターでは、倫理運動創始 80 周年を記念したフォーラムを令和 8 年度(令和 7 年 9 月 1 日から令和 8 年 8 月 31 日まで)に全国 6 カ所で開催いたしました。各研究フォーラムは 2 人の発表者による口頭発表と、私を含めた 3 人でのトークから構成されており、月刊誌『倫理研究』10 月号では、その中から 3 月 15 日(日)に兵庫で開催した「研究フォーラム in 兵庫」の口頭発表部分を文章化し、「研究フォーラム特集 1」として掲載いたします。

研究フォーラム in 兵庫のテーマは「確信を生きる」で、倫理文化研究センターの平良直専門研究員と高橋徹専門研究員が、それぞれ独自の視点で口頭発表を行いました。当日は 183 名の方々が来場され、熱心に発表を聞いてくださいました。研究フォーラムの開催レポートが以下の URL で公開されていますので、アクセスしていただければ概要をご覧ください(2026 年 8 月 25 日にアクセス確認済み)。

<https://www.rinri-jpn.or.jp/research/forum/>

さて、テーマ「確信を生きる」には、どのような問題意識が込められているのでしょうか。以下は、本研究フォーラムについて二人の発表者に記していただいた開催趣旨です。

私たちは今、どんな時代を生きているのでしょうか？

残念ながら、先の見えない迷路のような薄暗がりの中を手探りで歩んでいるように思われます。そして、あまり明るい気持ちになれず、不安に取り囲まれて、おそろおそろ前に進もうとしているのが、たいいていの人の現状かもしれません。

しかし時代とは、〈世の中のあり方がこうだから、このようになっている〉といった受け身のものではなく、私たちひとりひとりがその都度創り出す大小さまざまな渦の合流です。私たちの創意と総意、そして日々の行動の集積が全体としての時代を創っているのです。

このような主体的な観点から、漠然とした〈将来に対する不安〉を払拭して、希望にあふれる未来を創造する。そして、そのために私たちは何をしたらよいのかをみなさんとともに考える——それが今回のフォーラムの趣旨です。

この開催趣旨に込められているのは、私たちを取り巻く環境や時代はあらかじめ確定しているものではなく、自分自身もそこに参与し、創っていくものだということです。これは考えてみれば当たり前のことのように思えますが、私たちは時代の変化を、自分自身の判断や行動とは少し離れたところで進んでいくものとして捉える部分があるのではないのでしょうか。そのため、社会の変化を横目に、自分自身がそこにどのように関わりうるのかを考える機会が、必ずしも多くないように思われます。このような切り離された感覚が、「これからの時代はどうなるのだろうか？」「私はどこに連れていかれるのだろうか？」という将来に対する漠然とした不安につながっている側面もあるでしょう。

しかし、時代がどのような方向へ進むかは、私たち自身の考え方や行動と切り離されたものではありません。先行きが不確実で不透明なときほど、「世の中がこうだから仕方がない」と受け身になるのではなく、自分は何を拠り所として生き、どのような未来を創ろうとするのかを改めて問うことが重要になってくるでしょう。「確信を生きる」というテーマには、このような主体的な姿勢への問いかけが込められているわけです。

二人の発表では、この問題がそれぞれ「動じない生き方はいかにして可能か」および「信じる力」という異なる切り口から考察されています。平良専門研究員は、人間はそもそも不安や迷いによって「動じる」存在であることを出発点に、それでもなお他者を思いやったりいたわったりするなど、人間の人間たるゆえんを拠り所として生きる可能性を論じました。平良専門研究員の発表には、動揺そのものを否定したり、何事にも左右されない強さを求めたりするのではなく、揺れ動く自分を抱えながらも、生きる方向を見失わない姿勢が大切であるとのメッセージがあったように思います。人間の弱さを前提としつつ、それでもなお何を信じ、何を拠り所として生きるのかという意味での「確信」を問うものであったと言えるでしょう。

その上で高橋専門研究員は、そのような確信を支える力そのものに目を向けます。私たちは成長の過程で、他者からの評価や合理性を重視するあまり、本来備わっていた「信じる力」を次第に弱め、自分自身の感覚や判断にも確信を持ちにくくなっていくことがあります。そこで、複雑化しすぎた思考や外から与えられる基準にとらわれすぎず、自らの内面に立ち返り、自己への信頼を回復していくことの重要性が説かれました。そのため高橋専門研究員の発表には「クリーン&シンプルに」という副題がついています。

平良専門研究員が「何を拠り所として生きるか」を扱ったものだとなると、高橋専門研究員は、そのような拠り所を自分のものとして受け取り、そこから実際に生き方や行動を変えていくための「信じる力」をどう取り戻すかを主題とした発表であったように思います。

二人の発表を踏まえると、「確信を生きる」とは、複雑で不確実な時代の中にあってこそ、人間としての基本を大切にしつつ、未来に向けて自分なりのより良い「道」を模索しながら着実に歩いていくことなのだと思います。本特集号「確信を生きる」が、読者の皆様にとって、自らの生き方をあらためて見つめ、これからの歩みを考える一助となれば幸いです。